

# 第8回 木津川上流河川環境研究会 議事要旨

## 【開催概要】

開催日時：平成17年12月23日（金） 13：30～17：00

開催場所：名張シティホテル 天平・白鳳の間

## 【出席者】

委員：委員7名

事務局：木津川上流河川事務所（7名）

水資源機構（3名） 河川環境管理財団（3名）

オブザーバー等傍聴者：木津川上流河川事務所（5名） 水資源機構（10名）

## 【議事次第】

1. 開 会
2. 前回議事録の確認
  - 1) 第7回環境研究会の議事要旨
  - 2) ホームページへの掲載原案
3. 議 事
  - 1) 堰魚道WGの検討経過について
  - 2) 河道内樹林管理WGの検討経過について
  - 3) 河川ダム水量・水質WGの検討経過について
  - 4) 水辺の国勢調査計画の見直しについて
  - 5) フラッシュ放流等についての中間報告
  - 6) 今後の課題について（住民連携の取組みなど）
4. その他
5. 閉 会

## 【議事項目ごとの審議結果】

1. 開 会
2. 前回議事録の確認
  - 2.1 第7回環境研究会の議事要旨  
事務局から第7回の議事内容を説明し、全委員の了承を得た。
  - 2.2 ホームページへの掲載原案  
事務局から内容を説明し、ホームページ公開について全委員の了承を得た。
3. 議 事
  - 3.1 堰魚道WGの検討経過について
    - (1) チーフからの説明  
チーフから、第5回堰魚道WGの検討経過について説明が行われた。主な内容は、以下のとおりである。
      - 1) 木津川遡上アユ捕獲調査について
        - a. 今年度は、放流前の調査ができなかったこと、淀川大堰でのアユの遡上量が少なかったことから、遡上アユが識別できなかった。年によって差があることから、実態を把握するためには継続的な調査が必要である。

- b. 木津川における天然アユの遡上の意義をアピールするためには、淀川の河口からの遡上アユの三川分派の割合を明らかにすることが重要である。また、大阪湾に流入する他の河川水系における遡上実態を把握する必要がある。
  - c. これらの調査を実施する上で、淀川河川事務所（淀川環境委員会）との連携を進めるとともに、近畿地方整備局管内での情報共有が重要であると考えられる。
- 2) 室生ダム水質保全ダム魚道の魚類遡上調査について
- a. 室生副ダムで採取したアユを体重別にみると、明らかに二つの個体群に分類できる。
  - b. 体重の軽いものは、その遡上時間から考えるとかなりの確率でダム湖とその流入河川流域内で再生産されたものと推定できる。今後、予定されている産卵床調査等の結果から判断できると考えられる。
- 3) これまでの経緯と今後の検討方針について
- a. 堰魚道等改良事業推進に向けての取り組み
  - b. 今後のWGの進め方について
  - c. 堰管理者および流域住民啓発活動の実施
  - d. 堰魚道等の設計条件の整理

## (2) 討議内容

### 1) 木津川遡上アユ捕獲調査について

- a. 淀川大堰ではサイズ（体長）が小さく、上流では大きいという結果と調査日の関係から、本調査で捕獲されたアユは淀川の河口から遡上し成長したものと考えるべく、別の個体群と考えられる。
- b. 本年度採取した試料（アブラ鱈）による個体識別検査については、確実な方法の開発を待つことになるが、将来的に試験を実施する上で、継続的な捕獲調査と試料の確保が重要である。

## 3.2 河道内樹林管理 WG の検討経過について

### (1) チーフおよび事務局からの説明

チーフおよび事務局から、第4回河道内樹林管理 WG の検討経過について説明が行われた。主な内容は、以下のとおりである。

- 1) 樹林繁茂と土砂堆積の関連調査の実施に向けて
- 2) 河道内樹林管理に関する事例について
- 3) 小田中道築堤部樹林植生調査報告について

植生調査においては1種類<sup>(1)</sup>、昆虫調査においては5種類<sup>(2)</sup>の貴重種が確認され、対応策について説明が行われた。

### (2) 討議内容

#### 1) 樹林繁茂と土砂堆積の関連調査の実施に向けて

比高差がついた河道内においては、出水による攪乱頻度を増加させるために、高水敷化した河道の切り下げと洗掘河床の埋め戻しが必要であり、樹林の伐木や伐採と併せて、堆積土砂の処分についても検討すべきである。

#### 2) 河道内樹林管理に関する事例について

- a. 河道内樹林管理計画の策定にあたり、関東の鬼怒川におけるタケを対象とした事例を確認する必要がある。

<sup>(1)</sup> 改訂・近畿地方の保護上重要な植物 - レッドデータブック近畿 2001 - において絶滅危惧種 C

<sup>(2)</sup> 三重県レッドデータブックにおいて絶滅危惧 類が3種類、情報不足2種類

- b. ダム下流の洪水攪乱減少による樹林化対策として、天竜川の三峰川では土砂を流すバイパスの運用と併せて対策事業が開始された事例がある。ここでは、自然再生事業として樹林管理を地域住民と一体となって実施していることから、住民参加型事業として参考にすべきである。

3) 小田中道築堤部樹林植生調査報告について

- a. 植物の貴重種の移植に際しては、その周辺の植生も含めて検討すべきである。
- b. 昆虫の貴重種については、工事予定区域外での確認であるため、基本的には問題ないが、工事実施において配慮すべき要件であることを加筆すべきである。

### 3.3 河川ダム水量・水質 WG の検討経過について

(1) チーフからの説明

チーフから、第3回および4回河川ダム水量・水質 WG の検討経過について説明が行われた。主な内容は、以下のとおりである。

1) 第3回河川ダム水質WG

- a. ダム貯水池の放流水質等について
- b. 住民連携による取り組みの検討
- c. 水質監視体制の強化の検討および水質自動観測装置設置に関する検討（その2）

2) 第4回河川ダム水質WG

- a. 前回までの課題整理
- b. 室生ダムの水質状況について
- c. 水質調査計画の見直しについて

(2) 討議内容

1) ダム貯水池の放流水質等について（流域全体の議論）

- a. 近年の一般的な傾向として、室生ダムの流入河川に見られるように、BOD が減少傾向にある一方で、COD は横ばい、または増加傾向の河川が増えているようである。これは、流域の下水道などの排水処理が進む一方で、生物分解により処理しきれない COD 成分が残ることによるものと考えられる。このような傾向は今後しばらくは継続すると考えられる。
- b. 水質汚濁の生態系への影響について、その関連性を解明することは非常に難しいと思われるが、今後、今回提示されたような基礎資料（木津川上流域の取水・排水系統図）などを利用し、検討をしていくべきではないか。

2) 水質監視体制の強化の検討および水質自動観測装置設置に関する検討（その2）

- a. 水質自動監視装置については、設置規模、設備の大きさなど、もう少しコンパクトなものがあると思われる、機器仕様を十分調査する必要がある。
- b. 精度の違う水質項目の計測や平水時と出水時の計測など、目的、条件が異なる計測を一つの機器で対応することには無理があり、平水時と出水時の2系統に分けるなどの検討を行う必要がある。

### 3.4 水辺の国勢調査計画の見直しについて

(1) 事務局からの説明

事務局から、水辺の国勢調査計画の見直しについて説明が行われた。主な内容は、以下のとおりである。

- a. 河川水辺の国勢調査の枠組の変更について
- b. 総合調査地区の選定について

従来調査地区などをもとに、調査地区・調査項目別の環境の適否を検討した結果、木津川筋では1地区、名張川・宇陀川筋では1地区を総合調査地区（案）として提示した。

## (2) 討議内容

### 1) 総合調査地区（案）について

調査計画の見直しについては、国交省の主導で全国的視野から実施されており、本研究会で議論し決定するものではない。そのため、調査計画を効率よく実施できるように助言すべきである。

## 3.5 フラッシュ放流等についての中間報告

### (1) 水資源機構からの説明

水資源機構から、フラッシュ放流等についての中間報告が行われた。主な内容は、以下のとおりである。

#### 1) フラッシュ放流について

高山ダム・比奈知ダムの放流実験結果報告

#### 2) 土砂供給について

布目ダムの土砂供給実験報告

## (2) 討議内容

### 1) フラッシュ放流について

- a. 付着物を「活性のある藻類」、「古くなった藻類」および「シルト・粘土等」の3種類に分類することで、剥離のメカニズムを以前より明確にすることができたと考えられる。
- b. フラッシュ放流の頻度については、藻類の回復を考慮した間隔の検討が必要である。
- c. クロロフィル a とフェオフィチンについて、河床の堆積物だけでなく、流水中の調査も実施し、SS や VSS の調査結果と併せて見ることで、河川の流下に伴う付着藻類等の変化状況も把握できるのではないかと。

## 3.6 今後の課題について（住民連携の取組みなど）

### (1) 討議内容

- a. 河川環境に無関心な一般の住民をいかに事業に参加させるかが重要であり、それを誘導するような事業を考えるべきである。
- b. 生物の縦断方向の連続性が分断されているという現状を理解してもらって、多くの流域住民の関心を得ることが重要である。
- c. 木津川上流域での研究成果を流域住民に公開することが、まずは重要であり、ホームページでの公表、ワークショップの開催などを実施すべきである。

## 4. その他

次回の予定は、それまでに各ワーキングを開催することになるので、ワーキングごとに日程調整する。その後、年度内に本研究会を開催するよう調整を行う。

## 5. 閉 会

以 上